

読書

一九四五(昭和二十年)年「書館」の予定だったが、太平洋戦争が終わり、日本がGHQ(連合軍総司令部)の占領下にあった時代、岐阜市司町の県庁(当時、現在は県岐阜総合庁舎)にはGHQ岐阜軍政部が置かれ、民間の教育、経済、報道の統括管

運営は県費で行われ、日

県図書館に行こう

こんな情報^①が待っている。

理にあたっていた。

四七年四月、その軍政部の勧告によって、同市美江寺町に建設中だった県医師会館の二階が接收され、翌年五月に「民間情報部岐阜公民読書室」が誕生した。図書室の名称は初め「岐阜県教育図

本の出版物も備えられ

た。蔵書の構成は七割が洋書で、教育、語学、芸術、文学関係が多かった。米国の雑誌も置かれ、語学講座やレコードコンサートなども数多く行われた。五一年、占領の終了とともに岐阜県公民読書

蔵書の大半は米国寄贈

県公民読書室



県公民読書室で開催された語学教室

室は県立図書館分館扱いとなり、五七年、同市大宮町の岐阜公園内に新たに県立図書館館舎が完成

するところ、ここに吸収、統合された。県公民読書室に入った洋書は、GHQから寄贈

された、もともとは兵士用であったもののほかに、那加(現在は各務原市那加)にあった駐留米軍「キャンプ岐阜」付設の学校から、あるいは米国人個人、またはアメリカ文化センターからの寄贈、そして県費での購入など、さまざまな経緯を持つ。

これらの資料は四〇一五〇年代の米国出版史のひとつこまを切り取ったかのように、今も書庫に眠っている。当時の米国が何を日本に伝えようとしたか、また当時の日本人がこれらを通して感じた米国社会とはどんなものであったかを知ることができる資料として貴重なものといえる。